

小さな蕾

平尾コレクション
志田焼絵皿の魅力

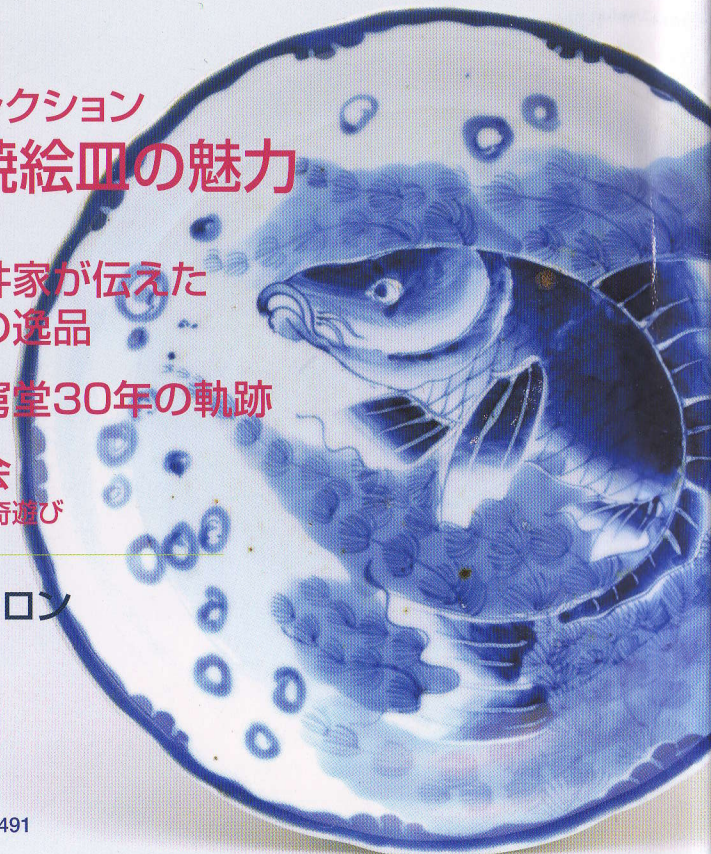
豪商三井家が伝えた
茶道具の逸品

浦上蒼穹堂30年の軌跡

游目の会
梅の園で数奇遊び

蕾特選サロン

6
No.491



第四回 古美術研究

游目の会

(会場) 池上梅園

東京都大田区池上二―二―十三

(期日) 平成二十一年三月二十九日

(主催) 古美術 桃青



第四回 古美術研究 游目の会

梅の園で数奇遊び

東京・大田区にある日蓮宗の名刹、池上本門寺。その脇に、池上梅園はある。

ここ池上梅園にて去る三月二十九日、古美術桃青が「第四回古美術研究 游目の会」を開催した。桃青店主が常連の客を中心に呼びかけ、「古美術談義に花を咲かせる場を」との思いで開いているものだ。幸い天候に恵まれ、寒の戻りもゆるく、早朝からの準備もはかどったようだ。

研究会であるが、古美術品を実際に観て、使って味わうという意味で茶会の形を採る。池上梅園には、茶室「聴雨庵」「清月庵」と茶会もできる和室棟

があるが、それらすべてを使用した。

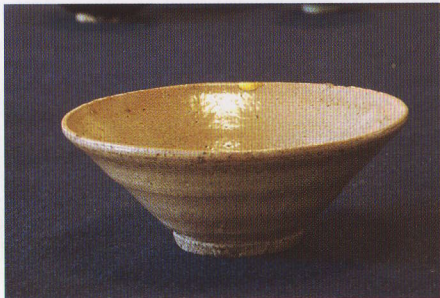
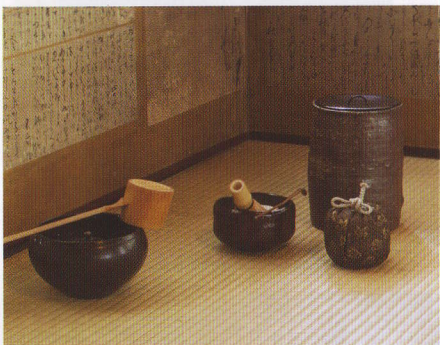
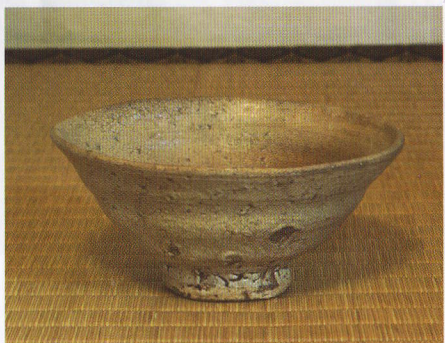
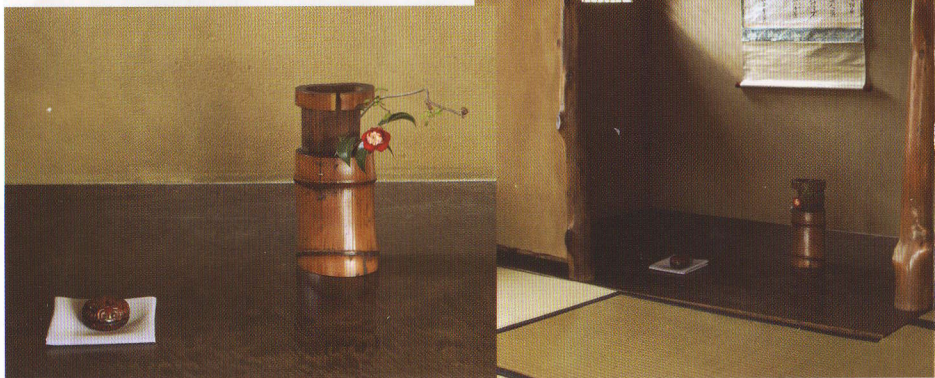
この日の日程は午前中に田中敏雄氏の講演、昼食の後に濃茶・薄茶、そして最後は恒例の「おたのみ抽選会」という内容。参加者は四〇人ほどだ。

開会の挨拶と講演は、和室棟の広間で行われた。玄関には常滑三筋壺に木瓜が生けられている。

長年漆芸家として活躍している田中氏は、古美術コレクターとしても知る人ぞ知る存在である。また、田中氏と桃青店主とは二〇年来の師弟関係。店主がコレクター時代に、購入した品物を田中邸に持ち込んだり、田中氏が購入した品物を見せてもらったりして、研鑽を積んできたとのこと。

田中氏の講演の中心は、若い頃、百貨店で開かれた高麗茶碗展で、井戸茶碗のよさが分かるまで何日も通いつめ、開眼した思い出など。田中氏が井戸を収集するきっかけとなった貴重な経験談である。

濃茶席



薄茶席



この講演のために田中氏はコレクションの中から、特に井戸の茶碗(六点・徳利(二点)・皿(三点)などを持参した。器形の異なる井戸のやきものが一同に会するのは、美術館でも見られるチャンスは少ない。参加者は井戸を手にとって、じっくりと観察したり学んだりして、とても満足気な様子だった。

昼食は「銀座あさみ」の懐石弁当。一部の野菜好みの参加者のために、「潤菜どうしん」特製の野菜懐石弁当を準備する気遣いも心憎い。

午後は、聴雨庵の濃茶から始まる。「一楽、二秋、三唐津」の言葉に習い、茶碗は一入作黒(碌々斎箱・古萩(黒水家伝来)・絵唐津横線文の三碗を使う。床は翠巖宗珉書「竹篋の偈」の墨跡。花人には沢庵宗彭作の竹一重切に、ト伴椿を生けてある。天明尾垂釜からは湯気が立ちのぼり、風炉先の張り混ぜ屏風

のどこかおかしみのある風情が、道具の発する緊張感を柔げてくれる。お菓子是小石川・一幸庵製。

床の「これを竹篋と呼べば名前に縛られてしまふ。竹篋と呼ばなければ違うことになる。さあ、何と呼んだらよいか？」という問いかけの「竹篋の偈」にちなみ、茶席に登場する道具についても、一つ一つの物の本質を自分なりに究めてほしい、という店主の願いが感じられる。このような知的な遊び心も、茶席の大事であろう。

濃茶席は店主が茶を練りもてなすが、道具の説明について熱が入り、時間はやや押し気味。客とのかけあいでは席は終始和やかである。

薄茶は清月庵にて。床は藤原為家の古筆。石榴と瑠璃鳥文の欄間を結界に用いるなど、流儀や形式にこだわらない柔軟さがある。

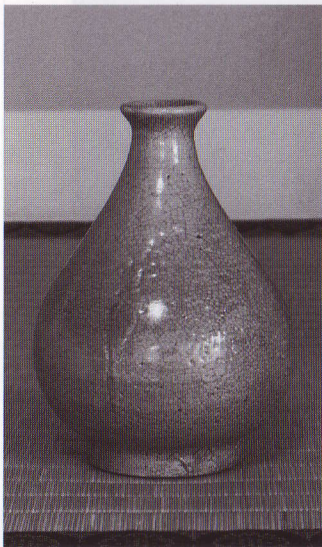
使用した茶碗五碗は、すべて高麗茶碗。薄器は枝

濃茶席（清月庵）

床 墨跡「竹鏡の偶」 大徳寺一九五世翠巖宗珉書
 江戸時代初期
 花 時のもの
 花入 竹一重切 伝大徳寺一五四世澤庵宗彭作 裏千家八世一燈宗室箱 江戸時代初期
 釜 天明霞肩衝尾垂釜 室町・桃山時代
 風炉先 張り混ぜ屏風 江戸時代
 筆者・小嶋宗真・久隅守景・飯尾彦左衛門常房・海北友松・三井高方宗徳
 鎌倉彫屈輪 大徳寺一八五世玉舟宗瑠箱 室町時代
 香合 鎌倉彫屈輪 大徳寺一八五世玉舟宗瑠箱 室町時代
 時代真塗
 江戸時代
 炉緑 信楽筒 室町時代
 水指 瀬戸播座 鎌倉時代後期
 茶入 傳首座作 家原自仙公への贈筒 江戸時代前期
 茶杓竹 黒楽一入作 表千家一代碌々斎箱 江戸時代前期
 茶碗 萩 銘いはほ（巖） 高鍋藩家老黒水家伝来 江戸時代前期
 菓子器 小石川一幸庵製「野辺の緑」
 根来長方箱 桃山時代

薄茶席（聴雨庵）

床 新古今和歌集切 二首伝藤原為家筆 古筆了信極 鎌倉時代
 花 時のもの
 花入 竹籠木耳 江戸時代
 梅堆朱 明時代前期
 香合 黒漆地梅螺鈿小箆筒 李朝時代後期
 棚荘 石榴瑠璃鳥文欄間 桃山時代
 結果 天明遠山鑽付平釜 小堀家伝来 石黒況翁旧蔵
 釜 江戸時代初期
 江戸時代初期
 炉緑 古材 長保寺（和歌山）の平安古材
 水指 織部（美濃伊賀）耳付 桃山時代
 薄器 枝垂柳桜蒔絵嵯峨棗 江戸時代初期
 茶杓 竹 茶屋宗古作 共筒 銘夜雨 江戸時代前期
 茶碗 御本 李朝時代前期
 井戸脇 李朝時代前期
 黄伊羅保 李朝時代前期
 金海割高台 蕎麦（蕎麦井戸） 李朝時代前期
 時代亀甲竹
 蓋置 佐波里 室町時代
 建水 高台寺蒔絵椽 千種家伝来 桃山時代
 水次 京都・柳桜園茶舗製「小桜」
 茶 赤坂・塩野製「桜花の里」
 菓子 黒漆輪花長円盆 元時代後期
 菓子器



垂柳桜蒔絵の嵯峨棗。棚荘の李朝螺鈿小箆筒などもあり、時代のあるものが薄茶席の魅力を高めるかのようにしつらえられている。

四組に分かれた客が茶会を終え、最後は参加者にとって期待に胸膨らむ「おたのしみ抽選会」。全員が和室棟の広間に集まり、品物を選ぶ順番を決める籤を引く。事前に参加者がほしいものを物色して置き、引いた籤の順番で品物を取っていくのだ。思い通りの品を手に入れた者、そうでない者の悲喜こもごもの声が交錯し、座は華やぐ。その雰囲気のまま終了の合図。散会した。

今まで知りあうことの少なかった同じ店の客同士で、共通の趣味を持つ人が顔を合わせる。古美術が引き合わせた座の魅力あふれる会であった。次回はいかなる趣向が凝らされるか。第五回が楽しみである。